

福井県大野市 山村喜一郎

事例のポイント・要約

- 有機物の施用に加えて、EM活性液を常に併用し連作を可能にしている
- 水田 200haと里芋 70aを有機JAS認定ほ場になっている
- 食味と貯蔵性の高いサトイモを栽培し、個人のお客さんを優先的に販売している



1. はじめに

当地域の周辺は水田地帯であるが、従来からサトイモは自家消費用に栽培されていた。現在では水稲とサトイモを通常7~8年の周期で栽培しないと連作障害による「忌地現象」をおこし突然ズイキが倒れ8月下旬ごろになるとほ場全体が全滅状態になり収穫皆無になってしまう可能性もあるが現在は3~4年ごとの周期で栽培しているほ場もある。10aのほ場を連作試験にして10年経過した。

このEMを活用した自然農法や有機栽培にこだわるのは、終戦後の農薬を多投する農業に疑問を感じていたときに地元の「阪谷自然農法研究会」の友人の紹介でEMを知り、土づくりには「よい有機物」と「よい微生物」が必要と感じていたから平成6年に導入した。

平成12年に市内の有機農業の生産者のグループ「大野有機の会」を結成し、生産行程管理責任者となり（財）自然農法国際研究開発センターで有機JASの認定をうけた。

2. 経営の概況

水稲耕作面積は600aで労働力は家族2人で作業全般を行っているが農繁期には雇用を行っている。主な出荷先は個人のお客を優先にしてデパートや北陸EM普及協会に販売している。

3. 栽培圃場の概要

1) 圃場の立地と周囲の地形

大野市は、市街地はかつての城下町の面影を強く残し、越前の小京都として知られる。主な産業は繊維産業が主体であったが、近年は電子部品など新たな製造業が伸びており構造が変化しつつある。農業はサトイモが特産で、市街地より南の上庄地区を中心に栽培されている。

2) 栽培条件

山村さんの地域は九頭竜川の上流沿いに位置し綺麗な清流に恵まれている。この水が水田やサトイモ栽培に活用され県内でも上質米の栽培地となっている。盆地で砂質土壌だが、サトイモ栽培には適している地域である。

3) 圃場の課題と育土の方向



現地研修会で説明



毎年、ほ場に有機質としてEMを活用した鶏糞、土壌改良材としての貝化石の粉末や、EM活性液とEMボカシを中心に施用して育土を行って来た結果サトイモ栽培に適した状態に改善されてきた。

4. 具体的な栽培技術

1) 耕起～作付けの準備

土壌改良に貝化石を施用し、植え付け前にEMで発行させた鶏糞とEMボカシを全面施用し、EM活性液を散布して鋤込む。サトイモの畝は高畝にしている。土がなるべく細かくなるように耕うんしている。春期の地温を保温することと雑草抑制のために畝に黒マルチをかける。

育苗は行わず畑に種芋を直接植えるが、畝ごとに種芋の大きさを揃える。種芋は10円玉以上の大きさの物を植えるようにしている。

2) 生育期間中管理

梅雨明け頃より、畝間の土が白く乾きかけたら畝高の半分くらいになるまで入水する。入水時間は夕方頃から定量になるまで入水し、翌朝までの間に落水する。わき芽かきは6月と8月に行う。

3) 雑草対策

株周りは黒色マルチで抑草し、畝間は草刈り機で行うが、除草は畝間に敷いて乾燥防止に活用する。

4) 病害虫の管理と対策

病害虫については、健康な育土に心がけEMやEM5号、木酢液などを活用して病害虫に侵されない栽培を心がけている。



葉脈の違い (左 山村 右 慣行)

5. 今後の課題や取り組みたいこと

慣行のサトイモ栽培農家は連作できず、ほ場のローテーションが問題となって作付け面積に制限を受けている。山村さんのほ場では連作が可能なほ場もあり、また栽培周期が3~4年と短縮され使いやすいほ場での大量生産が可能になり、消費者に好まれる良食味で形状のよいサトイモが収穫できるようになってきた。今後更に栽培周期期間の短縮に取り組み連作障害のない栽培を目指す。

消費者の健康への関心は高まってきているが、国内有機農産物に対する関心をもう少し高めて、農家と消費者双方で日本型農業の活性化に取り組み本来の農業をめざす。今年から始まったEM研究所の技術提携農家としてサトイモの連作の技術を普及して行きたい等有機農業にかける強い思いを持っておられる。

参考資料

1) 収量

年度	有機	近郊慣行
21	1500ka/10a	1300kg/10a



全国EM技術交流会北陸大会より抜粋引用